

論文の内容の要旨

論文題目 『源氏物語の準拠と話型』

氏 名 日 向 一 雅

源氏物語の作品論的な研究史は院政期の引歌や出典の指摘に始まり、鎌倉・室町時代における準拠説、江戸時代の本居宣長の「もののあはれ」論、それらと並行するようにして仏教的儒教的な解釈の流れを代表的なものとして挙げるができる。明治以降現代においても、それらの研究はさまざまな形で引き継がれ更新されつつ、テキスト論ほかの新しい文学理論をも併用して、源氏物語の複雑で多面的な特色を明らかにしてきた。

そうした多様な作品論、表現論、テキスト論による研究に対して、本論文集では主として源氏物語の準拠と話型構造に着目してみた。準拠の研究史の蓄積を再評価し、また繰り返される話型の構造論的な意味を問うことで、作品論的にどのような達成を示したか、テキスト論的にどのような地平を開いているか、主題論的にどのような展開をみせるか、そうした諸相を見定めることを目的とする。

まず序章において本論文集における「準拠」と「話型」について定義し、準拠論と話型論の研究史を概観して、それらが源氏物語論として有効な視点であること、また準拠と話型が源氏物語のすぐれて特色ある方法であることを確認する。

本論の構成はⅠ「王権と家の物語の構造」、Ⅱ「宿世の物語の構造」、Ⅲ「女君の流離の物語の構造」、Ⅳ「平安文学諸論」という四部から成るが、Ⅰ部では物語の準拠に注目しつつ、王権や政治、「家」の問題など、平安期の諸制度に関わる問題が物語の主題として構造化されていることを検討した。Ⅱ部では桐壺院一光源氏一夕霧、柏木一薫という父子の系譜に、一種の因果応報の物語の構造、

ないしは生き方の類似性、あるいは魂の傾向性が形象されたことと、その意味を検討した。そうした特有な構造を持つ物語として、これを「宿世の物語」と名付けた。Ⅲ部では「雨夜の品定」の諷諭の方法を確認するとともに、「雨夜の品定」を起点として、女主人公たちの系譜に流離譚が形成されること、そこに流離の主題の内面化していく過程を追跡する。第十七章は上記以外のテーマについての断章である。Ⅳ部では伊勢物語、大和物語、枕草子の諸問題について触れた。特に第二十章の枕草子の聖代観の問題は第一章から第七章で論じた親政や聖代観の問題の広がり、源氏物語以外の作品について展望するものでもある。

以下各論の概要を述べる。Ⅰ部の第一章「桐壺帝の物語の方法」では、源氏物語の開巻を飾る桐壺帝の物語は通説では醍醐天皇の時代を聖代と見なす延喜聖代観に則って語られたとするが、それよりも醍醐の皇統が光孝に始まる新しく成立した皇統（光孝—宇多—醍醐）であったように、桐壺帝の物語も成立して間もない新しい皇統の物語として出発していると考えられること、桐壺帝は醍醐に準拠する以上に、宇多の政治姿勢と深い共通性を有すること、桐壺帝の人物造型と皇統譜には仁明・光孝・宇多・醍醐の諸側面がさまざまな形で織り込まれていることを検証する。桐壺帝の物語は始めから聖代の物語として出発するのではなく、親政の実現を目指して格闘する帝の物語として始発したと捉える。

第二章では第一章を受けて、桐壺帝と左右大臣家の物語を分析する。敵役である右大臣とその娘弘徽殿女御の造型が、外戚政策によって政権を獲得した十、十一世紀の藤原氏摂関家のありかたと共通すること、右大臣家は外戚を目指した権門の典型であること、逆に桐壺帝を支える左大臣家が廷臣の家として理想化されること、桐壺帝は両勢力を互いに牽制させながら、親政の実現を目指す戦略的な帝王であることなどを論じる。第三章では桐壺帝と更衣の純愛と悲恋の物語が、桐壺帝の立場からすると、弘徽殿女御と右大臣家の勢力を抑止する戦略の一環であり、一方更衣の側には滅亡する家の回復を悲願とする家の遺志が存したこと、それが光源氏の受け継ぐ主題の一つとなること、また桐壺帝と更衣の物語が「長恨歌」の引用による「長恨」の主題を形成し、それが光源氏の担うもう一つの主題となることなど、桐壺巻の主題の複雑で重層的かつ射程の大きいことを論じる。

第四章「光源氏の王権と「家」」では、戦後の源氏物語論の大きな成果の一つである王権論について研究史を整理した上で、物語の予言の解釈、準拠の問題、

光源氏を「王」として位置づけていく表現のコンテキストなどを検討する。また光源氏の王権譚と抱合するかたちで「家」の物語が展開するが、光源氏が滅亡する明石一門の再生という主題を担ったこと、明石一門は光源氏を新しい先祖とする源家として再生したこと、明石一門の出自の王統の可能性などを論じる。

第五章「光源氏の儒教的形象」では臣籍に下った一世源氏、光源氏が太政大臣から準太上天皇になるという史上例のない特異な栄達に、光源氏の為政者としての儒教理念的な理想性が体现されていたことを『九条右丞相遺誠』や『令集解』に照らして確認し、源氏物語の理解には制度的な観点を媒介すべき必要のあることを論じる。第六章では桐壺帝と光源氏の人事政策に『寛平御遺誠』の人事方針と類似する点があると考え。第七章「平安物語における王権譚の展開」では、物語は歴史（正史）をどのように認識したのかという問題意識から、王権譚を取り上げた。物語文学の王権譚の展開を通観しながら、その背後に王権から疎外された悲劇の親王たちの無念の歴史があること、物語文学はそういう親王たちに対する鎮魂の意味を持ったと考える。

源氏物語には宿世観という観念が色濃く浸透しているが、Ⅱ部ではそうした観念を体现すると考えられる物語を「宿世の物語」と名づけ、それを「生き方の系図」を語る物語として話型構造論的に位置づける。第八章「光源氏と桐壺院」では、光源氏の生き方と父桐壺院の生き方との間に深層において類同的な構造が存することを確かめる。第九章「柏木物語の方法」では、柏木の生き方には太政大臣家の伝統に呪縛された家の観念があること、それが女三宮への恋の一因であり、その結果の密通であったが、それは源氏と藤壺との密通の明らかな繰り返しでもあった。そうした柏木物語の方法と意味を問うた。方法としては源氏の藤壺と紫上への恋が、柏木においては女三宮と唐猫への偏愛に置き換えられていること、柏木の死は光源氏にもありえた破滅の現実化であり、光源氏の陰画の物語であること、それは第一部の物語の質を逆転させる新しい虚構の地平を切り開くものであったことを論じた。第十章「「闇」の中の薫」では、薫の精神の彷徨が螺旋的に自己矛盾を深める閉塞性にあること、その人生には実父柏木の生の軌跡との類同的な構造が見られること、さらにその背後に光源氏の迷妄の「闇」が控えていること、薫は二人の「父」の宿業を引き受けていたと捉える。

Ⅲ部では「女君の流離の物語」という話型に着目して、その展開を辿る。第十

一章では「帚木」三帖の研究史を主題論の観点から展望しつつ、「帚木」巻が「桐壺」巻に始まる物語とは別のもう一つの物語の始まりであること、「雨夜の品定」は女の人生の定めなさに対する諷諭や教誡の文学としての性格を持ち、『白氏文集』の諷諭詩の方法に倣う、新しい物語の試みであることを論じる。特に「雨夜の品定」の諷諭の方法については、その物語批評としての意味と併せて第十二章で再論した。空蟬、夕顔物語はそうした諷諭・教誡の物語の方法と表裏の関係にあり、空蟬や夕顔の人生の定めなさを主題が流離譚へと展開すると捉える。

第十三章「朧月夜物語の方法」では、朧月夜が后妃の密通譚という「桐壺」系列の主題を担うとともに、他方で「帚木」系列の流離譚の主題をも担う女君であると捉える。朧月夜の人生は后妃の立場と光源氏への恋との狭間で自己同一性を確立できずに終わるものとして、その宙づりにされた人生の形象を心の流離の物語とした。第十四章「玉鬘物語の流離譚の構造」では、玉鬘が母夕顔の空間的な流離を引き継ぐこと、また玉鬘は継子譚に出自を持つヒロインであり、その流離も継子譚の話型に則るが、全体は継子譚のパロディになっていることを論じる。継子姫を救う男君であるはずの光源氏と鬘黒がともに救いの男君としては失格者として戯画化されることで、玉鬘は継子姫とは反対に救われず、心の流離を語る新しい物語の地平が開かれたと見る。

第十五章では第二部の女三宮降嫁の物語を継子譚を媒介に分析する。女三宮の降嫁は六条院の安定を破壊し、精神的葛藤と信頼の断絶に彷徨する不安定な人間関係をもたらすが、それが継子譚的方法的可能性によって引き出されたと考える。女君の流離が内面化されて心の流離の物語として到達した地点を示すものと捉える。第十六章では源氏物語の最後の女主人公であり、「人形」として登場する浮舟の人物造型の方法を検討し、その主題論的な意味を考察する。「雨夜の品定」に始まった女君の流離の物語が浮舟において仏道による救済に対する絶望と期待との狭間に揺らぐ物語の思想の到達点を考える。第十七章「源氏物語諸論」では語り、視点、源信の往生思想、韓国語訳の問題について検討した。

IV部では第十八章で伊勢物語の「東下り」、第十九章で大和物語の「蘆刈」譚、第二十章で枕草子という源氏物語の周辺作品の諸問題を検討したが、特に『枕草子』の表現には一条朝聖代観の論理が基本にあると考え、源氏物語の聖代観と併せて平安文学の思想として注目した。